昭和55年12月23日国鉄首都特別扱承認新聞紙第699号

週刊 うたごえ新聞

1/26 (1981年) NO. 843

THE SINGING VOICE OF JAPAN
日本のうたごえ全国協議会機関紙
発行 東京都新宿区大久保2-16-36
☎03 (209) 0638～9 うたごえ新聞社
振替口座 東京2—5631 昭和34年1月31日
第三種郵便物認可 毎週月曜日発行
1部80円（〒15円）・月330円（〒70円）

わたしが50才の紙芝居

「さあ〝ウサギの母さん〟の始まりだよー！絵の見えない子は、あたしを見てな！」——紙芝居が始まると、保育園の子どもたちは、子どもになったり、時には色っぽい目つきのお姉さんになったり、ダラシのないおじさんになったりする紙芝居屋さんに、一時間も魅入られています。

今では路上から姿を消してしまった紙芝居を子どもたちに見せたいと、初老といわれる年でもなお、自分の芸を磨き、子どもたちに届けたいと手弁当で保育園や幼稚園まわりをしている魚屋さんがいます。

うたごえ運動にとっても大切な、創造と普及の姿勢とその心を、ある日、訪ねて聞いてみました。

「紙芝居がテキ屋みたいに思われたが、子どもの成長を願ってやっている」（写真提供・カエルの会）

なぜ街の魚屋さんが？

「バットで親をなぐるなんて……」

滝口 忠さん（東京・調布市）

だと思っていただいて結構」とひょうきんに語る滝口さんですが、子どもたちのことになると顔が紅潮し、芸の話になると、座ったまま日本舞踊が始まり、しゃべり口は落語家そっくり。

踊りは芸者さんに

滝口さんが紙芝居屋だったのは、一九五一年～五五年の五年間でした。

三万巻の紙芝居を演じた、といいます。有名な「黄金バット」はもちろん、当時は住井すゑ原作「橋のない川」が「橋は誰のものか」という紙芝居にもなって、子どもたちに紹介されたこともある、とか。

かつては市川右太衛門主演で映画にもなった「旗本退屈男」の、独特な笑い方ができるまでに二年かかったなど、子どもたちに、より高みの芸を、と上野まで、毎月三百円の入場料を払って落語を研究に行きました。サラリーマンの月給が三千円の時代でした。二年間ほとんど毎日、元は吉原の芸者さんに、踊りの稽古をつけてもらったこともあります。

童謡の紙芝居を

「紙芝居はネ、読んで聞かせるんじゃないし、絵を語ってあげるんでもない。絵に芝居をさせるんですよ。カミのシバイなんだから」と芸の面白さを語る滝口さんは、紙芝居が「道楽」となった今でも「年をとると、体力にまかせた声の出し方じゃやっていけない」と、新聞で知った音楽センターのダイヤルを回したのでした。

いずれ「童謡でくるむような紙芝居をやってみたい」とその意欲には頭が下がります。ですから、一曲を完全にマスターするまで奈良さんにくい下がります。

しかし、滝口さんが熱心に紙芝居にうちこむのは、単に好きだからではありません。金属バットで親を殺してしまった青年や、子どもの自殺といった最近に触れ、「紙芝居のおじさんの拍子木や太鼓の音が聞こえれば子どもは〝自殺しよう〟と思ったことも忘れてしまうんじゃ……」、と紙芝居が盛んだった頃は、子どもの自殺はなかったと口調が特に熱をおびました。

「子どもたちはネ、先生や親に話さないことも紙芝居のおじさんには話したんです。『A君とB子ちゃんがお医者さんゴッコをやってるよ』なんてことは、あたしの友だちの校長先生は、いっぺんも耳うちされたことがないって」

子どもの鑑識眼

親戚から総スカンをくったほど、テキ屋や大道芸人と同じに見られていたという紙芝居稼業。子どもたちがお客さん気分になって、アメをなめなめ楽しんでくれなければ食べていけないおじさんたちはけっして馬鹿にできない子どもの鑑識眼を思いしり、「お客さん」に喜んでもらえる芸を開拓していたのでした。

歌も習って2年

ここ二年間、毎月、音楽センターに通って、奈良恒子さん（中央合唱団1期生）の声楽レッスンを受けている滝口忠さん（50歳）は、東京・調布市のお魚屋さん。この魚屋さんの車の中に、いつも積んであるのが、からくさ模様の風呂敷に包んだ紙芝居セットです。東京に魚屋修業に出る前は、千葉県船橋市で紙芝居屋だった滝口さんは、今でも週に一回、都内の保育所、幼稚園をまわって、子どもたちと紙芝居を楽しんでいます。

「あたしの紙芝居は、競輪や競馬みたいな、魚屋の道楽だと思っていただいて結構」とひょうきんに語る滝口さんですが、子どもたちのことになると顔が紅潮し、芸の話になると、座ったまま日本舞踊が始まり、しゃべり口は落語家そっくり。

▲滝口さんはいい芝居のためにと歌も習い始めました。

「紙芝居はネ、子どもに下から迫っていくんですよ。上から見ると、子どもの鼻の形のよさしかわからないけど、紙芝居のおじさんには鼻の穴の奥までよく見える。それで芸は高みを目ざす」と語る滝口さんは、自分の子どもが保育園に行くようになった時、園に申し入れて紙芝居を再開しました。

これまでは週に一度の保育園まわりだけでしたが、今年からは、無声映画、紙芝居などを提供する「カエルの会」に、〝童心〟の名前で登録。これからは日曜日も含めて、もっと精力的に働きます。

「紙芝居は芸術だ。その精神は国連の児童憲章だ」と滝口さんはキッパリと、その信念を、身ぶり、手ぶりや話術で伝えてくれました。

「カエルの会」への問い合わせは☎〇三—六〇五—九九八一まで。

＜第53号＞

創作特集号

ふめんだい

正月休み、熱海のホテルで大浴場にはいっていたら湯気の向うから声をかけられた。

新年会に来ていた東京のうたごえ活動家。風呂の中の驚き。

☆ ★ ☆

昨春、放っておいたスイセンの球根から芽が出ていた。ベランダの植木鉢から半分も根をさらして、水もやらず、陽も当たらず。

日常、見落としがちな生命力の強さに驚く。

☆ ★ ☆

モチがのどにつかえて死ぬ老人もいるが、今やニュース性は少ない。

タンがつまって少し血圧が高くなったら、救急車ばかりでなく保守政界人が飛んで来た。

罪人なのに罪人扱いされない、この国の政治の驚き

☆ ★ ☆

もうすでに
世を見つけ出た
寒梅の （未）